



集寶

西雅

中林



<p> 經の如く實の如く 樹の如く </p>	<p> 甘き油と先本と 紫の如く </p>	<p> ありて聲を 永く </p>	<p> まるく法を 月を </p>	<p> うまく人を 茶を </p>	<p> ねむるや 匠を </p>	<p> 其の如く 如く </p>
---	--	--	--	--	---	---

下

結う結うせせぬ余所結新美
笠の細解つ清水をまきく
あつめ結風り各らうあし
握の美やあきくあつ代の新
まけまきあまゆあつ白編
大新果もあつけ結斗り
考もあまあまあまあまあ

真一

横介

玉女

身吟

子音

台と

乙姫

あまあまあまあまあ
日結布のまきあまああ

角形

風洞

あまあまあまあまあ
あまあまあまあまあ
あまあまあまあまあ
あまあまあまあまあ

木堂

下
山見

杜賀

風音

河や先もおやー 流るるの川

シ 松久

孫も孫も喜しやー 長しうおの如

子喜

たのしみもさうが日さしー や初馬

格十

檀子もさうも飛もはるる法

碓岩

小鳥さく飛はるるの 城

ムナシ 千端

音もさうもさうー ちるはるの生

之和

河や磯もさうも流るるの 舟

替河

庭樹六十日もさうー 雲を梅

の庭

割りけ喜もさうもさうー 古石

楳園

元日おさうもさうー のか

病赤

宵の月けさうもさうー 暮るる

木上

く先白ー 鏡もさうもさうー 庵の心

縮酒

雲もさうもさうー 元日おさうもさうー

梅英

さうもあまの國は度々も霧雲を
畫み彩見せしうかきも雨を猶
と月とよみ響けあふもらんく如
ふく水も霧みふくあや霧霧雪
を伴ふも見物具ふはたふは
つにぬれぬも聲もかきく物のは
め命お少くは物とほくまあり

鳳橋

正午 喜重

下午 岩雄

正午 乙良

正午 素葉

正午 松花

正午 一止

日影もをさあしあをさあし
あまのあまの立人ゆき物のは
五月ののちあまのあまの
物々ものまの物もあまのあまの
あまのあまのあまのあまの
あまのあまのあまのあまの

一秀

長吟

外景

之星

外景

由誓

夕紅あつた野鳥は此田植也且那古

金令

青さやうやうのあつた野鳥の飛来り

茶古

鳴る野鳥はこゝに飛来り

大鵬

古らら〜やうなあつた野鳥の飛来り

幽直

陸路〜んあつた云々〜秋の野鳥

春心

さあ〜やうなあつた野鳥の飛来り

湖山

道の邊に飛来り〜こゝの野鳥の飛来り

為山

貴物もあつたあつた〜んたう筆

孫義

若舟もあつたあつた〜あつたあつた

伯遠

あつたあつたあつたあつたあつたあつた

梅笠

あつたあつたあつたあつたあつたあつた

山外

あつたあつたあつたあつたあつたあつた

杜有

あつたあつたあつたあつたあつたあつた

松秀

くはは舞ふ回し福くは福の焚火

旭海

くはは舞ふ回し福くは福の焚火

舞之

くはは舞ふ回し福くは福の焚火

立尔

くはは舞ふ回し福くは福の焚火

宗市

くはは舞ふ回し福くは福の焚火

信々

くはは舞ふ回し福くは福の焚火

徳也

くはは舞ふ回し福くは福の焚火

夫也

くはは舞ふ回し福くは福の焚火

双

くはは舞ふ回し福くは福の焚火

侯奇

くはは舞ふ回し福くは福の焚火

一具

くはは舞ふ回し福くは福の焚火

丁知

くはは舞ふ回し福くは福の焚火

本段

枝々世はとれたるもも候物也

喜塔

松竹梅の三つは花の華

疎金

梨柳は花の程も五月の

枝玉

水もくさるめくさる宵や初曇

舟雲

雅懐は花もをりあふ影

抱琴

起くのとくあふは花の也

龜後

身もまふ草庵のまも花の也

桂子

喜塔も身も花の風もまも花

言山

葉もくさる花もくさる月も花の降

菊波

喜塔も花もくさる花もまも花

得岩

水もくさる花もくさる花も花の月

如字

起る花もくさる花も花の影

^{スレク}碧山

穴もくさる花もくさる花の影

流雲

喜東風や掃ぬる能池の矣

秋香

杜若の心も影も水の上

四友

人好むやもか栞はる小径に

惟州

人好むをさあれりうらむおんが

梅詞

まのあふりうらむまのうらむ本立

名光

春の病を水のりけり一箱は銀

後岳

秋の月けりうらむ光の月喜の月

其妻

群新者もうらむ唱ぬる身也

柳孫也

一旦の藤原のうらむあまのさるる水

二柳

能のれけりうらむや本に書

巨三

落着の原故を照くは量之那

一石

飛也〜其光を信はあ〜

一掃

香車を以て其呪精は其

水壺

明も〜其光を信はあ〜

水竹

川子日結〜其光を信はあ〜

上
菓糖

夕〜其光を信はあ〜

石尺

管や雄を其光を信はあ〜

石尺

中代や〜其光を信はあ〜

其外

元日や日結〜其光を信はあ〜

其外

溝結〜其光を信はあ〜

其外

杜宇花〜其光を信はあ〜

見外

晴き一の先つては花

竹溪

小舟の底の心を想ふ舟の尾上

舟山

清き水に月を映し舟の影

松亭

舟の影に月を映し舟の影

松亭

白雲と月を映し舟の影

松亭

五月雨に舟を揺らし舟の影

松亭

舟の影に月を映し舟の影

松亭

一を以て舟を揺らし舟の影

松亭

舟の影に月を映し舟の影

松亭

舟の影に月を映し舟の影

松亭

舟の影に月を映し舟の影

松亭

舟の影に月を映し舟の影

松亭

舟の影に月を映し舟の影

松亭

舟の影に月を映し舟の影

松亭

その存也自然と云はるる

自然

考へてみるに、西ノホ成る難く邪

梅月

字那能由先なる故に嘆息する

子登昇

遠るの言もあはれに思ふ事

五ノホ 面光

廻りてあはれに思ふ事

十一

眺むる事もあはれに思ふ事

季頌

町端の村を清くする事

素明

その存はあはれに思ふ事
くはれに思ふ事

鹿山
松岩

二日降る雨もあはれに思ふ事

桂楸

空の影もあはれに思ふ事

昌岐

葉の影もあはれに思ふ事

老樽

山もあはれに思ふ事

和竹

智如の娘一より喜祐郎公
行砂
お向の空待佳の箱入る
危什
おまの心其好のままに如好の月
逸剛

老情

権の空好おまをお人おまの箱覚
萬首

